



D-MARK MAGAZINE

PERSON

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 藤田和久 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

SPECIAL

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家

◆ 菅野文子 / 小説家



タイランド 最新ホテル事情

第5回 スパ先進国タイ②



ヘルススパでは健康に対してホリスティック(全体的)にアプローチします。エクササイズは重要な要素です。

世界中からの観光客を積極的に受け入れてきたタイは、“ホテルスパ”という新しいスパのかたちをリードしてきたことは前回紹介したが、今回は“ヘルススパ”の 카테고리について紹介したい。数年前からアジアのスパ業界を支えているリーダー達が集まり、新しいスパ、消費者にとってより利用しやすいスパとは何か?という議論が活発に行われているのだが、その議論に筆者も参加しているので、その視点からタイの新しい“ヘルススパ”を紹介しよう。

ヘルススパ最高峰の一つ、チバソム

スパには幾つかのタイプがあるが、リゾート環境の中で医療専門家のアドバイスを受けながらより健康的なライフスタイルを目指す長期滞在型スパのことをヘルススパという。昨今のスパブームをリードしてきたタイにおいても、ヘルススパのカテゴリで世界の注目を集め続けているスパに、ホアヒンのチバソムがある。その評価は常に世界のトップクラスであるが、実はヘルススパのコンセプトはタイが発祥というわけではなく、タイに入る以前から欧米にあった。アメリカでは、1979年にキヤニオンランチがスタート、ヨーロッパでもっと大昔から言われている。

1995年にタイ政財界の重鎮ブンチュウ氏が、健康なくして何ぞこれ人生かな、とチバソムをオープン。当初はヨーロッパ型のスパメニューが殆どであったが、アジアの伝統療法を積極的に導入するなど、新しい試みへの挑戦が世界の注目を集めてきた理由の一つだ。そして、スパクイジーン(料理)を料理力カテゴリとして確立した事はチバソムの大きな功績である。また、チバソムがあるホアヒンは昔から王室のリゾートであり、治安の良さはお墨付き。高齢になった國王は今殆どこのホアヒンの離宮に滞在されている。俗世間から距離を置くには理想的なリゾートである。

一般的にヘルススパは辺鄙な所にあり、健康的な生活習慣は捨てさせられる。健康志向はありながらも、何故高いお金を払ってまで何もない、何も出来ない所に来ても辛い思いをするのかと来たことを反省する人もいる。理想的な生活であると理解していてもなかなか足を踏み入れない人は多い。冷たいビールが飲めない、TVもない、観光するところも



1

チバソムが開発したスパクイジーンは単なるヘルスフードではありません。魔法のような調理法と材料で美味しく同料理も遠隔に楽しめます。



2

ラリンジндаではアーユルヴェーダのドクターがコンサルテーションしてくれるのだが、恐ろしいほどよく当たります。彼のアドバイスには真面目に従うのが良いでしょう。

ない、夜遊ぶところもない、好きな食べ物が好きな量取れない、ストレス・リリースどころか、逆にストレスを感じてしまう人もいます。理想と現実のズレがここにある。

ハードルを下けたラリンジндаの登場

現在、スパはウエルネススパと理解を深めてきている。その中で、タイをはじめとする東南アジアのスパは、主に海外からの経済的に余裕のある旅行者をターゲットとしてきた。そこで一つの矛盾にぶつかる。健康は金持ちだけのものか…と。

2007年ウエルネスを掲げた最初のヘルススパ、ラリンジнда・スパ・ウエルネス・リゾート(以下、ラリンジнда)がチェンマイに登場。ヘルススパは常識的には辺鄙なところ、俗世間から隔離された場所に設定されるが、ラリンジндаは観光地として名高いチ



3



5



4



7



6

1 左手は最新設備を整えたスパ棟。右手木造の建物は140年を経過したランナーハウスを修復して利用しています。

2 市街を一望しピン河を見下ろすバスタイムもなかなかの気分になります。

3 ラリンジндаのお部屋はどれもモダンでラグジュアリーです。プールアクセスのお部屋もあります。

4 ラリンジндаではフレッシュハーブを多く利用します。毎朝契約ハーブ園から届くハーブでハーブボールを造る実演を見せてくれます。

5 ラリンジндаにはシリントン王女が来たこともあるほどです。

しかし、もちろんヘルススパとしてのコンセプトも保っている。アーユルヴェーダのドクターが常駐し、宿泊客にコンサルテーションを行いながら、取るべきスパメニューやライフスタイルをアドバイスしている。コンサルテーションもヨガも宿泊客には無料で行われている。また、気が向けばチェンマイの街歩きを楽しむことが出来る。要は、宿泊客の希望を尊重したストレスのない環境設定をしているヘルススパなのだ。ラリンジндаがある場所は、元々チェンマイでは知られたドクタージндаのいた場所。病院がスパに変わったのだが、健康に対処するアプローチが違うだけなのである。

エンマイの中心地にある。アルコールの摂取はゲストの主体性に任せ、食事もスパキージン以外の通常の食事を用意、トリートメントさえも客の任意であり、ルームレートには含まれていない。全てにおいて強制をしていないのだ。スパ業界としては議論の余地があるが、ヘルススパとしてはハードルを下げたスパと言える。

新しいスパにして輝かしい実績

そしてラリンジндаのもうひとつの特徴は、施設やサービスはラグジュアリーと評価出来るレベルで、スタッフのクオリティも高いのに、その価格設定がとにかく安いということだ。これは余談だが、あるラグジュアリー系ホテルがチェンマイにオープンする時、そこにラリンジндаのスタッフが履歴書を持っていったところ、無条件で採用になったというほどだ。その報告を受けたラリンジндаのオーナーは複雑な心境であったそうだ…。

2008年、バンコク市内にラリンジндаのデイスパがオープン。こちらには医師はいなくスパプールもないが、基本的な考え方はチェンマイと同じである。ラグジュアリーにしてとにかく安い。オーナーにその価格に対する考え方を聞いたのだが、「他が高すぎるだけ。高い価格ではビジネスが何時までも続かわけない」との簡単な答えが返ってきた。ラリンジндаはスパ業界の議論を先取りした新しいスパの有り方・方向性を実践で示して



■土橋 告 (どばし つくる)

1952年生まれ。サンヨーインターナショナル代表。海外の独立系ホテルの日本でのマーケティングを行っている。特にタイとは30年以上の関わりがあり、タイのツーリズム、ホテルマーケティング、スパには強いこだわりを持っている。

(著書)

最大の津波被災地カオラックにオープンした奇跡の誕生秘話の「サロジン物語」と、海外のホテル、主にタイのホテルと日本のホテルとを比較・論じた誰でもわかる「外資に負けないホテルマーケティング」解説本。ダイヤモンド社 1995円

サンヨーインターナショナル <http://www.hotelmarketing-jp.com/>



チェンマイのラリンジндаは、2008年にタイ国政府観光庁からデステイネーションスパ(ヘルススパの業界名称)としてアワードを獲得。バンコクは、2009年のアジアスパ・ウエルネス・フェスティバルにおいてゴールドアワードを獲得している。さらに今年8月、チェンマイのラリンジндаはシリントン王女の2度目のオフィシャルな訪問を受けた(1度目はオープン時)。これはタイにおいては異例のことである。

いるのは間違いない。顧客満足度とは、顧客が想定する価格以上のサービスを受けた時に高くなるのである。そして、スパはストレスリリースのビジネスである以上、顧客にストレスを与えないスパであることは大事なことだ。それが既存のヘルススパの考え方に反している。

■記事・写真提供 ■土橋 告 氏